

中野先生との時間

中野先生とは御縁があったのだとしみじみ思う。

「遅塚先生の後任に、あなたの先輩にあたる、ナカノタカオ先生が千葉商大から都立大に移って来られることになりました。」中野先生の名前を初めて耳にした時を、今でも鮮明に覚えている。大学四年生だった一九八八年四月二八日のJR中央線車内である。そう語られたのは、清水廣一郎先生である。大学三年に専門課程に進学した際、都立大学から本郷に移籍してこられた遅塚忠躬先生を紹介して、イタリア中世史の大家である都立大教授の清水先生を紹介していただき、清水先生が同大学で主催していた小さなイタリア中世史の自主ゼミの末席に待らせてもらっていた。翌年四月に清水先生は母校の一橋大学に移籍なさった。一橋大学に文献複写に出かけた際、偶然清水先生にお目にかかり、新しい研究室を見せていただき、今度卒論の文献を相談しましょうなどと話をした。前述の会話は、その時一緒に帰りの中央線に乗った際のものである。翌日清水先生が心臓発作で急死なさったこともあり、中野先生のお名前も含め、その時の全ての会話は私にとって忘れ難いものになった。

亀長洋子

その後も私自身、都立大学には縁があった。今日に至るまで研究上大変お世話になっている徳橋曜さん（現富山大学）、歴史学研究会ヨーロッパ中世史・近世史合同部会で同時期によく一緒に来た多田哲さん（現中京大学）、イタリア史の研究会によく来てくれた三浦敦子さん、本郷によくいらしていたフランス近世史の佐々木真さん（現駒沢大学）などの当時の都立大の院生の方々、そして清水先生の後任として都立大教員となられ、学振特別研究員時代の指導教員をお願いした河原温先生（現放送大学）や若い時からこやかに話しかけてくださった先輩の中嶋毅さんといった都立大教員の方々とお話しする機会が少なからずあった。その中で、中野先生の噂も自然と聞こえてきて、学生指導に熱心な先生なのだあとという印象を持っていた。当時の都立大は私にはとても幸福な共同体のように思え羨んだものである。中野先生の単著『プラーグ街の住民たち』が出た時、ああ、あの中野先生というのはこういう研究をしているのか、と、当時歴史のコナーの書籍としてはまだ珍しかった住宅史の本をふむふむと眺めたものであった。

月日は流れ、私は学習院の教員となった。数年を待たずして、島田先生と私には、福井憲彦先生の学長就任に伴い西洋近代史の教員を探すという使命が下された。学習院の教員にふさわしい方は、学者として立派なのは大前提だが、それだけではなく、学生に心から愛情を注げる人でなくてはならないことを、もう私も理解しており、ぜひ中野先生をお願いしたいと考えた。願いは叶い、先生は学習院の教員となられた。ある程度お年を召してからの着任でもあり、短くはない時間をこの大学で過ごすことは先生の人生にとっては大きな決断であったと思いつつ、先生が後悔しないように過ごしていただけのよう尽力しようという思いを胸に刻んだのを覚えている。

御着任ののち、中野先生がワインと鼻歌でできていることが判明した。鼻歌を歌う先生はとても微笑ましく、一瞬フランスの風が通り過ぎるような気分になる。そうしたちよっと肩のこらない姿を示せるところが、学生たちに先生が人気の理由の一つなのだろう。「中野先生大好きです」と叫んだ学生や「先生に一度に二時間も三時間も相談に乗ってもらったのにいい卒論が書けなくて」と申し訳なさそうに話した西洋近代史ゼミ幹事がいたのも懐かしい。

長年ご一緒に過ごした四年生演習では、中野先生は学生の優秀さの如何に関わらず、論じたいこと、主張したいことは何かをそれぞれの学生に一貫して強く問い続けていたように思う。基礎演習でディスカッション形式を好まれたのもその現われであろう。学生指導において、先生が私に与えた影響は大変大きなものがある。ご自身のご研究の話や社会を見る眼においても、何を問題視しているのか、をしれば熱く語られた。ゼミ合宿の往路のバスの中で、先生がその夏

に過ごされたパリの様子を聞かせていただいたり車窓の風景について語り合ったりしたのも私には幸福な思い出である。

ご退任まで一年を残す頃から、先生は時折学習院での日々を振り返る発言をさりげなくなさるようになった。「学習院の学生はほんどん（歴史の勉強が）できるようになっていく過程が面白い」との言葉を耳にした時、「ああやっぱり、学生に愛情を持てる方にきてもらってよかった」とほっとした。先日、四年生二名に、大学の授業で何が面白かったか尋ねたところ、二人とも「史学概論」と即答した。一年生が人によっては録音してまで理解しようと努めた先生の史学概論の面白さは、確実に伝わっているなあと実感した次第である。先生には史学概論の講義内容を出版なさる計画がありとうかがっている。くれぐれも健康に留意されてご専門の現代都市史研究も含めますます歴史学に貢献なされ、時折学習院にも姿を見せてくだされば、かっつての同僚としてはこの上もない喜びである。